

一般国道9号松江道路建設予定地内

文化財発掘調査報告書Ⅲ

(布田遺跡)



0年3月

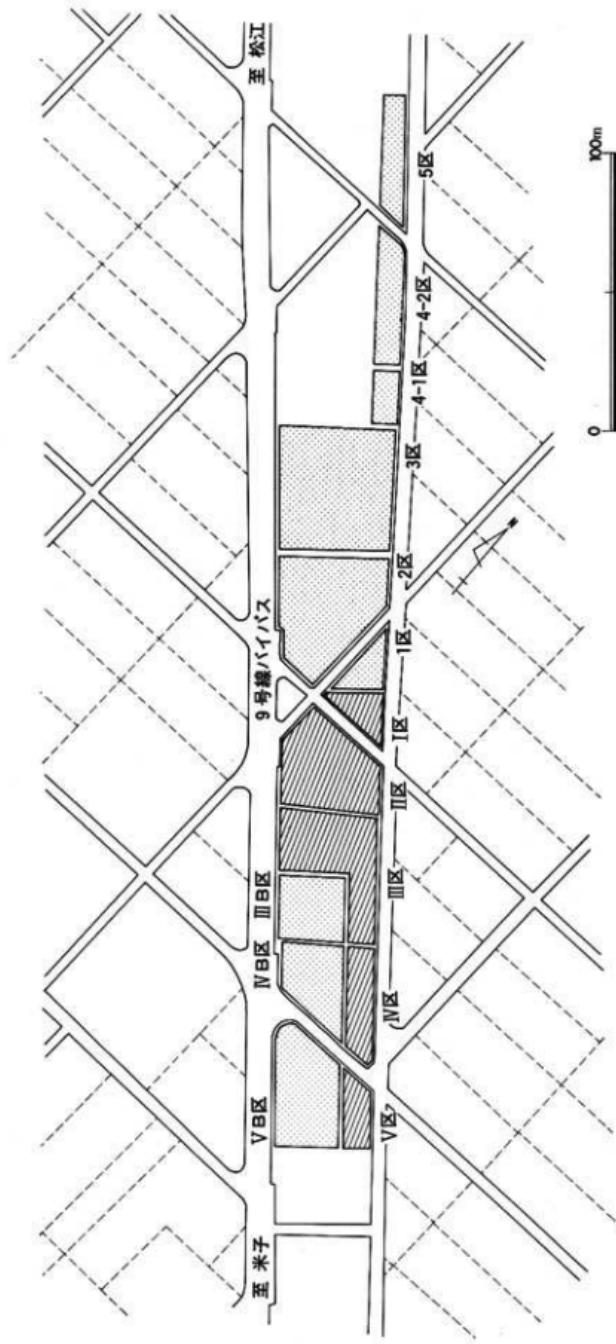
建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

布田追跡調査区配置図

平成元年度調査区

昭和63年度調査区

凡例



序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが、避けることの出来ない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当松江道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の御協力のもとに昭和50年度以降現在まで、約4億円の費用を投じ発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成元年度に実施した布田遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると併に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへの御理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御諸導御協力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成2年3月

建設省中国地方建設局
松江国道工事事務所長

菅原信二

序

島根県教育委員会では平成元年度、建設省中国地方建設局の委託を受けて、一般国道9号松江道路建設予定地内の布田遺跡の調査を実施しました。

一般国道9号松江道路建設予定地内の調査は、昭和50年度から昭和57年度にかけて現在使用されている二車線の暫定道路部分の調査を行い、昭和61年度からは隣接する本道建設部分の調査を実施しております。

本年度の調査区は、昭和63年度調査区の北側にあたり、弥生時代中期と古墳時代中期の溝跡や、中世の掘立柱建物跡、土壙が検出されました。昭和63年度の調査でも弥生時代の遺構が数多く検出されており、本年度の調査結果と考えあわせますと、付近に弥生時代の大規模な集落跡が存在すると考えられます。

本書が、出雲の古代文化の中心となった意宇川下流域の歴史を解明する手がかりとなり、また広く埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに役立てば幸いです。

なお、調査にあたり、御協力頂きました建設省松江国道工事事務所をはじめ、関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

島根県教育委員会

教育長 原 田 俊 夫

例　　言

1 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成元年度に実施した一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査概報です。後日昭和63年度布田遺跡発掘調査の結果とあわせて、本報告を作成する予定です。

2 本年度は、布田遺跡の調査を実施し、発掘地は次のとおりです。

布田遺跡 — 島根県松江市竹矢町1262他

3 調査組織は次のとおりです。

事務局 泉 恒雄(文化課課長), 井原 讓(同課長補佐), 勝部 昭(同課長補佐), 野村純一(文化係長), 吾郷朋之(文化係主事), 三浦宏仁(文化課嘱託), 別所重一郎(島根県教育文化財団嘱託)

調査員 ト部吉博(文化課埋蔵文化財第3係長), 北脇孝夫(同教諭兼主事), 八幡賢一(同教諭兼主事), 萩 雅人(同主事)

調査指導者 山本 清(島根県文化財保護審議会会長), 三浦 清(島根大学教育学部教授), 田中義昭(島根大学法文学部教授), 永嶋正春(国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授), 東村武信(京都大学原子炉実験所教授), 高橋 譲(岡山県立博物館副館長), 富山正明(福井県教育庁埋蔵文化財センター), 福島正実(石川県立埋蔵文化財センター), 岩本正二, 佐藤昭嗣, 鹿見啓太郎, 伊藤 実(広島県立歴史博物館)

4 本書で使用した遺構略図は次のとおりです。

SD—溝, SB—掘立柱建物跡, SK—土壤, SP—ピット

5 本書で使用した方位は磁北を示します。

6 本書の執筆・編集は調査員が討議して行ないました。

7 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は建設省松江国道工事事務所作成の工事図面をトレースして使用しました。

8 本遺跡出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会で保管しています。

I. 遺跡の位置と環境

布田遺跡は、意宇平野の中央部、松江市竹矢町字布田とその周辺に所在しています。昭和55年から56年にかけての発掘調査では、弥生時代前期から中期の溝跡や土壙、古墳時代の溝跡等が検出されています。

意宇平野周辺には古くから人々が住んでいたらしく、多くの遺跡が見つかっています。绳文時代の遺跡では、意宇平野縁辺や馬橋川下流域付近に竹ノ花遺跡、法華寺前遺跡、才塚遺跡等が知られています。弥生時代の遺跡では、住居跡が検出された石台遺跡、勝負遺跡、平所遺跡や水田跡が検出された夫須遺跡や上小校・向小校遺跡等があります。

また、弥生時代の人々の墓として、的場土壙墓や墳丘を盛った来美墳丘墓や間内越墳丘墓が造されました。古墳時代になると意宇平野周辺の丘陵上に多数の古墳が築造されるようになりました。大形の古墳では、方墳の石屋古墳、山代方墳、大庭鶴塚古墳、前方後円墳の井の奥4号墳や手間古墳、前方後方墳の山代二子塚古墳、岡田山1号墳、円墳の山代円墳、岡田山2号墳等が知られています。この他にも西百塚山・東百塚山古墳群や後谷・荒神谷古墳群等の小規模古墳群や安部谷横穴群、小谷横穴群といった横穴群が丘陵上や丘陵斜面にたくさん造られました。律令時代に入ると、意宇平野周辺には国府をはじめ意宇郡や意宇軍団、黒田驃などの公的施設や、出雲国分寺、国分尼寺、来美寺等の寺が築造され、出雲府の政治、文化の中心地として発展していった様子がうかがわれます。



1. 布田遺跡
2. 石台遺跡
3. 勝負遺跡
4. 平所遺跡
5. オノ峠遺跡・オノ峠1号墳
6. 中竹矢遺跡・中竹矢1号墳
7. 夫須遺跡
8. 法華寺前遺跡
9. 才塚遺跡
10. 上小校・向小校遺跡
11. 的場土壙墓
12. 間内越墳丘墓
13. 井ノ奥古墳群
14. 石屋古墳
16. 大庭鶴塚古墳
17. 山代二子塚
18. 山代方墳
19. 山代円墳
20. 手間古墳
21. 岡田山古墳群
22. 百塚山古墳群
23. 後谷・荒神谷古墳群
24. 小谷横穴群
25. 安部谷横穴群
26. 出雲国分寺
27. 国分尼寺
28. 出雲国分尼寺窯跡
29. 来美寺
30. 来美寺窯跡

II. 調査に至る経緯

今回の布田遺跡の調査は、昭和55～56年に行なった暫定道路部分の隣接地にあたる本道工部分と、昭和63年度に行なった本道工部分調査の残りの部分について行ないませんでした。

一般国道9号松江道路は、6車線が計画されており、昭和57年に行なわれた島根県主要関連道路として併用するために、発掘調査は昭和55・56年の2カ年にわたって計7遺跡（春日遺跡・夫敷遺跡・布田遺跡・中竹矢遺跡・オノゾ遺跡・勝負遺跡・石台遺跡）で調査を行ないました。

その後、昭和60年度に建設省から一般国道9号松江道路の残り4車線の本道工部分の発掘調査依頼があり、協議の結果、昭和61年度に春日遺跡から発掘調査を再開しました。本年度は、本道工部分調査の4年目であり、松江道路ルート内の布田遺跡の調査を昭和63年度から引き続き行ないました。

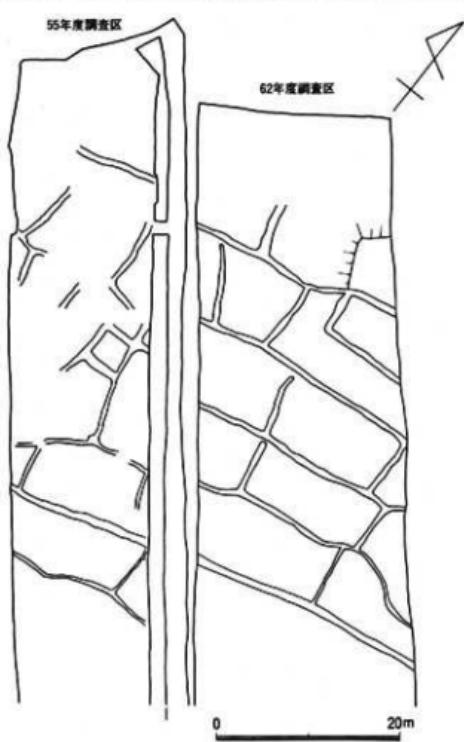
III. 調査の経過

今年度は昭和63年度調査区域の北側にあたる1～5調査区と、昭和63年度に検出した弥生時代の旧河道の続きを追うために設けたⅢB～V B調査区の発掘調査を行いました。発掘調査は4月25日に第1調査区から着手し、弥生土器を多量に含んだ溝状遺構や弥生時代の旧河道等を検出し、6月14日遺構の実測と写真撮影を行い1区の調査を終了しました。引き続いて第2調査区の発掘調査を実施ましたが、溝状遺構や土壤、ピット群等を検出し、溝状遺構からは弥生土器や古墳時代の土師器が出土しました。2区とほぼ並行して、5月16日Ⅲ B区から順に旧河道の調査を行いました。旧河道には遺物包含層が約2mにわたって堆積し、弥生土器が多く出土しました。この他、遺物包含層堆積後に穿たれた溝状遺構をⅢ B区とⅣ B区で検出し、Ⅲ B区の溝状遺構からは古墳時代の土師器が多数出土しました。Ⅲ B～Ⅳ B区までの土壤サンプリングを行い、8月10日旧河道部分の調査を終了しました。3区からは溝状遺構、土壤、ピット群を検出しました。出土遺物は少なく、土壤と数穴のピット内から土師質土器片や木製品、柱根が若干出土した程度でした。10月19日ピット群の俯瞰写真撮影を行い、10月30日に終了しました。4・5区は幅10mのトレンチ調査を行い、4区は用水路を境に南側を4-1区、北側を4-2区としました。4-1区、4-2区ともに溝状遺構を検出し、遺構内から若干の遺物が出土しました。5区には遺構がありませんでした。4-2区のSD-02から杭列を検出したため、調査区の西側を一部拡張してSD-02と杭列が西側に続くことを確認し、全日程を終了しました。なお、調査期間中の8月5日に現地説明会を実施しました。

IV. 調査の概要

1. 弥生時代

■ 水田跡



▲夫敷遺跡 水田跡

今から2,300年前に人々の暮らしはそれまでと大きく変わりました。その原因としてアジア大陸から稻作りの技術が伝えられたことがあげられます。暮らしの中心はそれまでの狩りや木の実を集めたりすることから、稻作を中心としたものになりました。田をつくり、水を引き、苗を育てて、穂り入れと春から秋へ季節とともに、一年周期で稻作りが営まれるようになりました。

写真は、布田遺跡から約500m離れた夫敷遺跡から発見された弥生時代の水田跡です。水田跡は畦によって調査区内だけでも15に区分でき、水田1枚の大きさは、およそ8m~15mの長方形になるようです。

■ 用水路

米作りには水は欠かすことができません。春から夏にかけては水を引き入れ、穫り入れ時には排水をする必要がありました。そのため弥生時代にも用水路がつくられましたが、写真は用水路に使われたと思われる溝のあることです。溝の底には土器の破片や石器が多数溜っており、この用水路の上流には人々が生活していたと思われます。近景の写真に石がかたまって写っていますが、この石によって用水路の水位の調整をしていたのではと考えられます。

▲ 2区用水路近景



▲ 2区用水路遠景

▼土器だまり



■住まい



▲勝負遺跡竪穴住居(近景)

▼勝負遺跡竪穴住居(遠景)



竪穴住居は、縄文時代から平安時代まで長い間使われた建物です。そのほとんどは人々の住居として建てられましたが、中にはムラの集会所や祭りの場、また玉造りなどの工房として使われたりもしました。

上の写真は布田遺跡から2.4km離れた勝負遺跡で発見された竪穴住居跡です。調査では弥生時代の後期から古墳時代の中期までの住居跡が確認できました。弥生時代に米作りが始まるとき、平地は田にするため貴重となり、人々は小高い台地状のところに住居を建てるようになりました。平坦面が得られない場合は、斜面を削って平坦面を作つてから建てることもあります。勝負遺跡の住居跡は台地状の地に建てられています。その他、勝負遺跡では発見されませんでしたが、弥生時代の集落にはよそのムラからの襲撃に備えてムラのまわりに濠が掘られることもありました。竪穴住居は、地面を円形や方形に50cm前後の深さに掘り下げ、その上に骨組みを作り草ぶきの屋根をつけました。なかには中央部に穴を掘つて炉をつくり、採光や暖をとったりするのに使いました。



▲竪穴住居復原想像図

復原して建てられた竪穴住居▶
(松江市大草町風土記の丘資料館)



■ くらしの道具

今から約12,000年前に日本列島で土器がつくられるようになりました。それまで生では食べられなかった植物類も、土器に入れて煮炊きすることで食べられるようになり、食生活が安定し始めました。弥生時代にも土器は人々の生活に広く使われました。弥生時代の土器はその使い方によって大きく3通りに分けられます。下の写真左は、^{いた}甕と呼ばれる土器で、コメやその他の穀類、イモ類を煮炊きしたのに使われました。甕の内側に、こげ飯状の物質が付着した例も他の遺跡で見つかっています。写真中央は壺と呼ばれる土器で、穀物や木の実などを貯蔵するために使われました。写真右は高杯と呼ばれる土器で、食物を盛るのに使われました。



▲布田遺跡弥生時代前期の土器

壺は口縁が小さく、全体の重心が下の方にあり安定した形をしています。甕は重心が上の方にあり、下へいくほど細くなります。島根県では前期の高杯はまだ発見されていません。土器をつくった粘土の中に大粒の砂が多く混じっており、土器に文様を入れる際、ヘラのような道具で一本一本描いていくことも、前期の土器の特徴です。

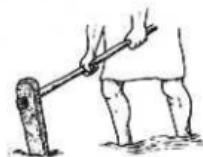
壺の口縁部が朝顔の花のようになります。大きくなれば、文様も派手になってきます。甕は胴の張りが目立つようになり、前期に比べ厚さが薄くなり、煮炊きするのに効率が良くなりました。文様はクシのような道具で一度に何本も線を入れるようになりました。また、地方によって装飾文様、形態に特色のある土器が作られるようになりました。



▲布田遺跡弥生時代中期の土器

■木 器

鍬の使い方



鍬の使い方



▲布田遺跡の木製鍬(左)と鍤(右)

水田を耕すために弥生時代にも、さまざまな道具が使われましたが、その主なものは木製の農具でした。農具は大別すると「鍬」と「鋤」に分けられます。弥生時代には鉄は貴重品であったため材料にはカシの木が使われました。布田遺跡では、鍬と鋤の未完成品が数点発見できましたが、その中には孔があけられ、柄をとり付けければ鍬として使えるものもありました。鍬や鋤は、除草や畦づくり、水田面を水平にするなど用途が広かったようです。その他先端がいくつかにわかれた「又鋤」は湿地を深く耕したり、土ほぐしに使われたと思われます。鋤は、足の力を利用して深く土に押し込み、土をまわして耕すのに使用し、形は現在のスコップによく似ています。弥生時代後期になると鉄が普及し始め、鍬や鋤の先端部分にだけ鉄製の刃をはめ込み、じょうぶな農具となり、それまでよりもさらに深く耕すことが可能となりました。



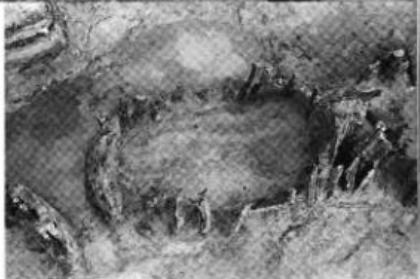
▲木製鍬出土状況

上の写真は木製農具が発見された時のものです。埋もれていた場所が湿地で水気が多く、木製品も適度な湿り気を保っていたため、保存状態が極めて良く、ほぼ原形に近い形で発掘することができました。

■ 弥生人の工夫

▲木製農耕具未製品の保管場所 ▶

布田遺跡の河底の部分からは、写真のように木の杭が円形状に並んでいたものが発見されました。これは、農業に使う鍬とか鋤の材質がとても硬いカシ材であることが多く、それを加工しやすくするため、発見されたような杭の開いの中に、材料となる木を水漬けしておいたのでしょう。水に漬けることによって、木のくるいも少くなり、また木が加工しやすくなります。その後、石器で削って完成させていきました。



①原石



②砥石で磨く



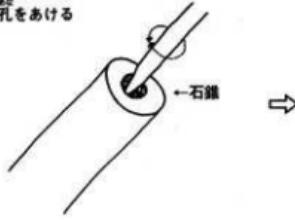
③溝を入れて削る



④円柱に形を整える



⑤孔を開ける



⑥完成品



管玉の作り方

くだたま 管玉は首かぎりなど装身具に使われ、布田遺跡出土の管玉はほとんど緑色凝灰岩でできています。

管玉のつくり方はまだ明らかにされていませんが、大まかなつくり方を説明します。まず原石を加工しやすい大きさに削っていき、砥石で磨いて形を整えさらに小さくしていきます。適当な大きさになったところで石製の錐のようなもので溝を入れ細くしていきます。角柱にしていき、すじの入った砥石で円柱状にしあげて、最後に石製の細い錐で孔を開けると管玉の完成です。布田遺跡から管玉の未完成品が多く発見されたことから、近くのムラで管玉をつくっていたと考えられます。

■石器



穂り入れ用の石器▶

実りの秋になると稲の収穫が行なわれます。穂り取りには主に石包丁と呼ばれる石器が使われました。孔を2つあけ紐を通して手の甲にその紐をかけるようにして石包丁を握り、稲の穂を刃部と親指の間にはさんで摘みとりました。当時は1枚の田の中にも品種のばらつきがあり、稲によって実る時期に少しづつ差が出て、実った稲から穂っていったと考えられます。

米作りが始まても狩りや漁業は続けられ、シカ・イノシシや魚類は弥生時代の人々にとっても重要な食糧でした。布田遺跡では黒曜石やサスカイトで作られた石鎌(矢じり)や弓と思われる木製品(昭和55年度調査で出土)、それに石製の槍の先端部分が発見されました。弓は狩りに際しての有力な飛道具でしたが、戦争用の武器としても使われました。

◀狩猟用石器



◀加工用石器

弥生時代には、切ったり削ったりする道具として石器が使われました。左の写真は石斧と呼ばれるもので、斧のようく木を伐採したりカンナのように木を削ったりするものに道具を使い分けっていました。農業に使う木製の鍬や鋤、竪穴住居や土木工事用の木材を得るために、威力を發揮したことでしょう。



■ 海と山の幸



▲布田遺跡で発見された木の実

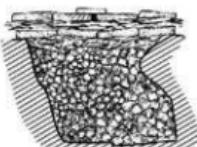


▲石台遺跡で見つかった貯蔵穴

弥生時代には漁業も行なわれており、中海や意宇川に近い布田遺跡では、網を使った漁業が想像できます。網自体は発見されていませんが、自然の石の両端を打ち欠いて切り込みを入れた石錐と、中央に紐を通す孔のあいた土錐が発見されたからです。魚の他、貝も食べられており、布田遺跡ではシジミの貝がらも発見されています。

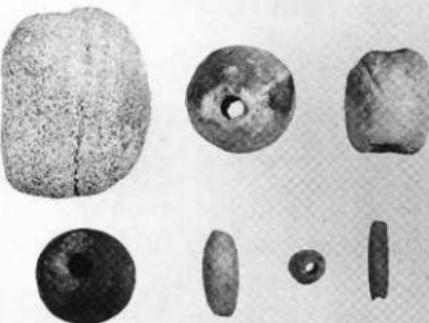
縄文時代には人々は木の実を食糧の一つとしてきましたが、米作りが始まった弥生時代でも引き続いで食糧とされていました。布田遺跡では、Donduri・Kurumi・モモの種・トチの実が発見できました。特に、Donduri・Kurumiの量が多く、Kurumiの殻は半分に割られたものがほとんどでした。Donduriの食べ方としては、保存食として乾燥させたり、アグ抜きをして製粉し、だんごのように加工して食べたとされています。

▼貯蔵穴内の想像図



布田遺跡から約3km離れた石台遺跡で、堅穴住居の近くに底の方が広くなる袋のような形をした堅穴が掘られていたのが発見されました。深さが約90cmあり、

弥生時代中頃のものと思われます。このような穴は貯蔵穴と呼ばれ、食料を長期間保存するために使われました。貯蔵物としては、米が多かったようですが、アリ・ヒエ・ムギなどの穀類や、シイ・モモなども收められました。それ以外の利用法として、種穀を土器に入れて保存していたことも考えられます。



▲布田遺跡で見つかった石錐(左上)と土錐

■まつり

中国で書かれた歴史書の「魏志」の「東夷伝」によると、朝鮮半島では5月の種まきと10月の収穫の時期には、酒を飲みながら夜中舞い踊るという祭が行なわれていたそうです。弥生時代の遺跡からは、銅鐸・銅錘・銅劍などの青銅器や、琴・土笛などの楽器、うらないに使った骨(ト骨)などが発見されており、日本でも同様の祭が行なわれていたと考えられます。なかでも銅鐸の表面には、人々が狩りや魚をとる姿、杵と臼で脱穀をする様子、高床倉庫や、シカ・イノシシ・水鳥(ツル)などの絵が描かれており、当時の人々の暮らしぶりを垣間見ることができます。



▲布田遺跡の分銅形土製品

弥生時代の中ごろになると、秤の鐘に使う分銅に似た土製品があらわれるようになりました。この分銅形土製品は中国・四国・畿内の一帯で発見されています。やはり祭りに使われたと考えられますが、くわしい使い方はまだはっきりとはわかっていません。



弥生時代の祭りのための道具のなかに銅鐸があります。銅に錫を加えた青銅で作られ、最初は、つり鐘のようにつるしてベルのように鳴らしたと考えられています。ところが時とともに大形になり、音を出す目的よりも見た目のみごときの方が大切になってきました。左の写真は布田遺跡で発見された銅鐸の形をした土製品ですが、青銅製の銅鐸と同じように祭りの道具としてつくられたものと考えられます。つるす部分が欠けていますが、復原すると12cmくらいになると思われます。現在、全国で52例以上発見されていますが、島根県では初めて発見されたものです。

▼タテチョウ遺跡で発見された土笛

▲布田遺跡の銅鐸形土製品

右の写真は、松江市のタテチョウ遺跡で発見された土笛です。土笛は中国から伝えられ、上の大きな穴に息を吹きこみ、四つの孔を指でいろいろ組み合わせてふさいで音色を変えて、オカリナ(西洋の笛)のような音が出ます。



2. 古墳時代



▲ 2区SD-02(北東より)

弥生時代の文化の発展から、クニを統率する力をもった人々が現われ、この人たちのお墓として、小高く土を盛り上げた古墳が出現しました。このような古墳がつくられた時代を古墳時代といいます。布田遺跡でも、古墳時代の遺構・遺物が検出されました。

第2調査区SD-02

この溝は、第2調査区の南隅部を東西方向に走り、幅1.4~1.5m、深さ28~36cmです。この溝は、出土遺物・埋土及び方向等から、前年度調査で検出された第I調査区SD-01とつながると推測されます。

第III区調査区SD-01

この溝は、旧河道の包含層に掘り込まれており、幅0.8~1.3m、深さ20~43cmで、土師器の土器の他、勾玉が出土しました。



▲ III区SD-01(南西より)

■くらしの道具—土器

古墳時代に使われた土器には、弥生土器の流れを受けついだ「土師器」と、大陸からもたらされた新しい技術によってつくられた「須恵器」という2つの種類があります。

土師器

土師器は、800°Cくらいの温度で焼かれた素焼きの赤味をおびた土器で、古墳時代から奈良・平安時代にかけて日常の道具として用いられました。弥生土器は、つくられた時期や地域によって、クシ目、あるいはヘラ焼きなどのもようが付けられることがありましたが、土師器ではそうしたもよはほとんどみられなくなりました。また個々のかたちも全国的に共通性をもつようにもなりました。このように、地方によって多様な特色をもっていた土器を1つにまとめるような社会の変化が起こったことを、この土師器の出現にみることができます。



▲III B区SD-01 発出土状況



▲土師器 壺

口径14.7cm、器高25.9cmの古墳時代中期の土器で、下半部はススで黒くなっています。



▲土師器 高壺



▲土師器 高壺



▲土師器 高壺形器台

高壺のうち、左は2区SD-02から、右はIII B区SD-01から出土したものです。ふたつは若干形態が異なりますが、ともに古墳時代中期のものです。高壺形器台はIII B区SD-01から出土したもので、上に壺などを置いたと考えられています。県内では出土例の少ない貴重な資料です。



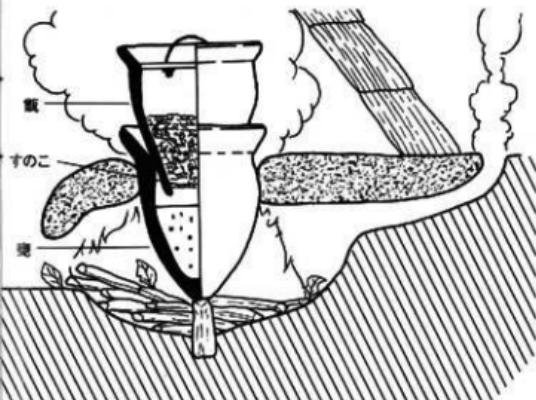
▲ⅢB区SD-01 豚出土状況

こしき
豚と呼ばれる土器が、布田遺跡から出土しています。

器高は15.7cm、口径21.7cm、底径9.3cmで平らな底になつていて、穴が中央に1個、周りに5個あります。口縁部は外傾していて、端部は平坦に仕上げてあります。把手の部分は、胴部に穴をあけて差し込んで取りつけてあるようです。

豚は、下から蒸気をあてて蒸す道具として使われていました。実際は下の図のように、大きめの甕で水をわかし、その上に豚をおいて米などの穀類を蒸していました。この豚によって、従来の煮る方法だけでなく蒸す方法も加わり、食生活が大きく変化しました。

この他にも、土師器には²³甕(小皿のような物)、壺がありますが、布田遺跡では細片が多かったため、夫敷遺跡の出土品を参考として載せておきます。



▲豚の使い方



▲土師器 豚 (正面)



▲豚 (底部)



▲土師器 壺 (夫敷遺跡出土)



▲土師器 壺 (夫敷遺跡出土)

須恵器

須恵器は5世紀ごろ朝鮮半島から渡ってきました。技術者によってもたらされました。この土器はロクロを使用して形を整え、斜面を利用して築かれたあな窯で1000℃を超す温度で焼いたもので、青味を帯び、堅く焼けしまっています。布田遺跡では耕作土中から破片が数点出土しています。



▲須恵器(中竹矢1号横穴出土)

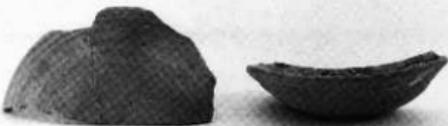
■装身具

勾玉

ⅢB区 SD-01からは前述のような土師器の土器の他、装身具としての勾玉が1点出土しました。

この勾玉は、めのう製で上半部が欠けており、色は半透明で白濁色をしています。外側の背の部分には研磨した跡が残っています。

勾玉は孔にひもを通して、単独で首に下げることもあります。管玉などを混じて一連として用いることもあります。



▲須恵器(布田耕作土中)



▲ⅢB区SD-01勾玉出土状況



勾玉の残っている部分は長さ2.2cm、幅0.8cm、重さ3.7gです。

3. 中世のくらし



▲上空から見た掘立柱建物跡

布田遺跡では、直径が20cmから50cmの穴がたくさん発見されました。穴は長方形に並ぶものが多く、穴の中に柱の根本部分や礎盤に使った平らな石が残っているものもあり、掘立柱建物を建てるために掘られた穴だということがわかりました。掘立柱建物は、平地に穴を掘り柱を直接さし入れて建てたものです。布田遺跡の掘立柱建物跡の周辺からは瓦がみつかっていないので、屋根は板葺きか草葺きだったと思われます。建物の配置をみると、四面に庇のついた大きな建物が2棟離れて建っていて、そのまわりには小さな建物や土塹がありました。庇のついた大きな建物には支配的地位の人々が住んでおり、まわりの建物はそれに従う人々の家や倉庫ではなかったかと考えられます。

掘立柱建物跡の西側でみつかった土壙の使用目的は、いまのところわかりませんが、中からは穀物をつくのに使う木製の堅杵や、ドングリが出土しました。出土したドングリは熟したものが多く、食用であったと考えられます。



▲廻付掘立柱建物の復原予想図

(山口県埋蔵文化財調査報告書第43集下右田遺跡よりトレース転写)



▲土壙から出土した堅杵

V. おわりに

今回の発掘調査の結果、弥生時代から中世にかけての様々な時代の遺構や遺物が見つかりました。なかでも弥生土器の出土量が多く、意宇平野にたくさんの弥生人が住んでいた様子がうかがえます。また、古墳時代や中世の遺構が見つかっていることから、弥生時代以降も人々が住み続けたことがわかりました。この他、現在は完全に埋没した弥生時代の河道が発見されたことによって、布田遺跡の集落が河辺につくられていたことがわかりました。今後、布田遺跡周辺の調査が進めば付近の弥生集落の様子がさらに詳しくわかっていくことだと思います。



1.洗浄 出土した遺物の泥を取る



2.注記 出土地点や出土年月日を墨で記入する



3.接合 接着剤で接合する



4.復原 欠損部分を石こうで補てんする



5.実測 出土遺物を実測する



6.繪図 遺物や遺構の実測図をトレイスする

整理作業の流れ 発掘調査と並行して、室内では下記のような作業を行なっています。

一般国道9号松江道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
(布田遺跡)

発行 1990年3月

編集 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

印刷 有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89